

平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)

第4講：情報化社会と「たすけ合い」

岡田正彦

牧畜・農耕社会から工業社会、さらには脱工業社会へと、人間の社会はその主要な生産様式の変遷や新たな技術の開発、社会構造の変化にともなって歴史的に変容してきた。とくに「近代化」と総称される、産業化にともなう社会構造や生活様式、人々の精神構造の根本的な変容は、18世紀後半の産業革命によって加速され、日本を含めた世界中を席卷した。

明治維新を分岐点として近代化を促進し、大きく変わり続けた日本社会のなかで創始され、歴史を積み重ねてきた天理教の教えは、同時代の人々に生きる意味を与え、人々の生活を支えるうえで、どのような役割を果たしてきた—あるいは、今後も果たしえる—ののだろうか。

従来、「日本の近代化と宗教」といったテーマを論じる際には、日本の社会構造や産業構造の変化、急速な経済成長などを宗教が一主に倫理的側面においていかに支えてきたかといった議論が主流であった。しかし、近年では2度の世界大戦や冷戦時代を経て近代化の負の側面が表面化するなかで、「近代」のもたらした変化を根底から再評価する議論も広く行われている。ポスト・モダン、後期資本主義、情報化社会などと呼ばれる新たな社会状況のもとで、天理教の教えをもとに今日を生きることに、いかなる意味があるのか。今回の講座では、「たすけ合い」の概念を中心に、この問題について考えてみた。

*

全体主義の起源を問い、現在でも影響力の大きいドイツ系ユダヤ人の政治哲学者、ハンナ・アーレントは、その著書『人間の条件』の中で、人間であることの条件から生じる人間の活動力として、「労働（生存・繁殖に不可欠な行為）」「仕事（職人的な制作活動に象徴される社会的・文化的行為）」「活動（他者と共存する中で行う活動）」の三つを挙げて、近代化がもたらした“負の側面”について論じている。

アーレントは、近代化によって「労働」が先行し過ぎたために、「仕事」が労働化し、他者と交わる「活動」さえも停滞したと指摘する。彼女自身の言葉をかりれば、その状況は次のようなものだ。

産業革命は、すべての仕事を労働に置きかえた。その結果、近代の世界の物は、使用されるべき仕事の産物ではなく、消費されるのが当然の運命であるような労働の産物となった。（ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994年、186頁）

社会のあらゆる側面に経済原理が浸透することで、社会的な役割を果たす使命感や他者と共に生きるという人間本来の姿が失われ、あらゆる人間の活動は結果的に労働化することになる。

生命を維持するための活動である「労働」は、人間以外の動物も行う活動である。ということは、かつては名誉や誇りといった経済原理とは本質的に異なる動機から行われた活動も近代社会では、いつしか経済活動の内側に取り込まれることによって、人間の行動原理は著しく動物化することになるのである。アーレントは、こうした状況について、次のように述べている。

近代世界は、たしかに必要〔必然〕にたいして勝利を収めた。しかし、その勝利は、労働が解放され、〈労働する動物〉が公的領域を占拠してはじめて獲得されたものである。（同上書、195頁）

近代の課題の一つを「労働する動物（animal laborans）」の勝利と「仕事する人間（工作人 homo faber）」の没落に見るアーレントの指摘は、前近代社会から近代社会への移行を「ゲマインシャフト（共同社会）」から「ゲゼルシャフト（利益社会）」への移行と捉えるような近代史観と相俟って、名誉や義理・人情のために命を賭ける、古き良き時代へのノスタルジーに結びつけられることもあるだろう。しかし、前近代社会の陥穽を乗り越えることで成立した近代社会の問題は、単純な伝統社会への回帰によっては決して解消することはできない。

*

行き過ぎた個人主義や競争原理を脱却して、意味を必要とし、他者とともに生きる人間の活動的生活を取り戻すことは、近代のデッドエンドに直面している現代社会にとって危急の課題の一つである。しかし、これは前近代社会への回帰ではなく、より良き未来の実現を目指す方向性（近代の超克ではないポスト・モダンへの志向）に向かうものでなくてはならない。

今回の講座では、石崎正雄氏の論文「教祖御在世当時の村の助け合い」（石崎正雄編『教祖とその時代—天理教史の周辺を読む』道友社、1991年所収）を紹介しながら、地縁・血縁や身分制度に制約される前近代社会における人々の行動原理について考察した。当時の人々の行動を「義理としての助け合い」とする石崎氏の見解は、次のような言葉に集約されている。

人はいつの時代にも、どこでも、助け合いたいと望みつつも、それが純粋な形では行うことが出来ない現実の姿をみせつけられるのである。人が人を助けることの限界がそこにある。そして人は、信仰の世界の中で、それを求めようとすることになる。（63頁）

近代社会は、個々の人々の主体的な自己実現を妨げる、このような前近代社会の枠組みを解体し、個人を解放することで成立してきた。サミュエル・スマイルズの著作を中村正直が翻訳し、広く読まれた『西国立志篇』のなかで説かれた「自助の精神（天はみずから助くるものを助く）」などは、近代社会の基本的な原則をよく表している。人間の行動が、共同体の約束事や身分制度によって厳しく制約されていた旧来の社会システムを解体し、人々を解放する近代の理想自体は、決して否定すべきものではない。

しかし、自助と自己責任の思想は、利己主義や他者との競合を前提とする成果主義に転嫁されがちである。主体的な自己実現を理想としながらも、利己主義や競争原理を超克して、つねに他者に寄り添う意識があらゆる場面で必要とされている。信仰の主体性を前提としながら、「人をたすける心」への転換を説く天理教の教えは、こうした現代社会の状況に極めて適合した思想であると言えるだろう。次のような「おふでさき」の精神が最も求められているのは、むしろこれからの時代なのである。

わかるよふむねのうちよりしやんせよ

人たすけたらわがみたすかる

三号 47

天理台湾学会第 20 回国際学術大会に参加して

佐藤浩司

台湾で開かれた天理台湾学会第 20 回国際学術大会に参加するため、9月8日より12日まで、台北を訪問した。大会は、10日、11日の2日間。10日は、国立台湾大学図書館国際会議場における公開講演が行われた。公開講演会では、陳雪華台湾大学図書館長、孫大川代表の祝辞と、財団法人交流協会今井正代表のメッセージ（代読）があり、二つの講演があった。第1講は、台湾打里摺文化協会理事長の鄧相揚氏による、「天理大学参考館所蔵『臺灣岸裡文書』的學術価値」、第2講は、学会の会長でもある本学の下村作次郎教授が「翻訳で読む台湾原住民文学（従翻訳來看台湾原住民文学）」であった。いずれも天理大学に関わる発表であり、人であったのが印象深い。

11日、中国文化大学において、「台湾研究の国際化と深化」と銘打った学術大会を行った。下村会長の挨拶の後、中国文化大学呉萬益校長及び本学飯降政彦学長の祝辞があった。いずれも、中国文化大学と本学との間に長く続いている友好関係、特に教授交換及び学生の交換留学をはじめとする人的交流や、学術、文化、スポーツを通じての交流について触れ、今後ますますの伸展を希望していると述べられた。

研究発表は、28人の研究者が6分科会に分かれ、総計130余名の参加者を得て行われた。筆者は、第4分科会（宗教部会）において、「日本統治期台湾における寺廟整理」（通訳 佐藤圭司）と題して発表した。なお、天理関係では、海外部の高佳芳氏が「台湾傳道一世紀的天理教—高山佈教的検討和今後の課題」と題して発表した。この大会には、下村、佐藤の他に、本学から飯降政彦学長をはじめ、学会の理事として事務局を担う、三嶋健男、前田均、深川治道の各氏と宮田裕生氏が参加し、他に太田耕軌、金子昭、交換教員として赴任している許容敏の各先生の参加があった。

今回は、飯降学長となって初めての台湾訪問であったので、大学に関係する機関への表敬訪問も行われた。まず、8日は、長い間姉妹校として親密な交流のある中国文化大学を訪問、まず創設者である張先生と夫人の記念墓地である曉峰墓園に参拝、学内見学の後、呉萬益校長と飯降学長とが会見した。飯降学長より、永年の温かい交流に対する感謝の言葉があり、ことに、交換教授として中国文化大学（以前は中国文化学院）に赴任した教授によって天理華岡会ができ、この会を中心として天理台湾学会（当初は天理台湾研究会）が設立して、今回、日文組の先生方の協力によって、中国文化大学を会場に研究発表を開催することができることに、謝意を表明した。これを受けて呉校長は、姉妹校としての歴史的意義を確認し、今後、末永く交流をさらに続けられることの希望を述べられた。夜には、呉萬益校長主催の歓迎宴が催され、これには張鏡湖理事長をはじめ、林彩梅元校長など、天理との関わりの深い先生方が出席、中には、交換教授の宿舎や待遇に関する具体的な問題に対する解決策などが話し合われたが、終始和やかな宴会となった。

9日午前中、飯降学長は、三濱善朗台湾伝道庁長の案内で、財団法人交流協会（かつての日本大使館）に、今井正代表を訪ねた。飯降学長より今回の学会に援助を頂いていることに感謝

の言葉を述べると、今井代表は、天理の学術交流をはじめとする台湾との友好的な交流について関心を示し、今後の活躍を期待された。午後には、学術交流の協定校である国立台湾師範大学を訪問、謝國恩校長不在のため、鄭志富副校長と面会した。まず、学校案内のDVDを視聴し、飯降学長が、両校の交流をこれから積極的に進めたいと、今回訪問の趣旨を述べ、鄭副校長がこれに、交流が始まってまだ浅いが、これからスポーツをはじめとする交流を深めていきたいと答えた。その後、旧台北高等学校の校舎がそのまま使用されている学内を見学した。夜には、原住民運動の中心的な役割にある方々との会合ももたれた。

10日は、午前中、台湾伝道庁の月次祭に参拝、飯降学長が講話を行った。学会の役員は、祭典の途中で失礼し、台湾大学における公開講演の準備を行った。公開講演については、約80名の聴衆があった。講演の後、学会の懇親会を学内の鹿鳴堂にて開催した。台湾大学図書館長、台湾文学館元館長など、多数の来賓を迎え、70名の会員が参加した。なお、11日の学会終了後、ふるさと会台湾支部総会が、今回の訪問に合わせて三濱善朗支部長の呼びかけにより開催され、30余名のふるさと会員が集まり、遅くまで賑やかに宴がもたれた。今回は、学会開催という学術的な方面と、新学長の表敬訪問という友好親善の面とが両々相俟って、短期間ではあったが、有意義な訪問となった。

第 20 回国際宗教学宗教史会議世界大会

標記学会が8月14日から22日にかけて、カナダ・トロント大学を会場に開催され、本学から以下の発表があった。

澤井義次： Hindu Religious Experience and Discourse: Vedic Philosophy as Scriptural Hermeneutics
(パネル名： Interpretations of Religious Thought as a Discourse of Religious Experience)

堀内みどり： The Activities of 'Love Green Nepal': Freeing Women from Local Manners and Customs
(パネル名： Women, Religion and Human Rights)

(堀内記)

日本宗教学会第 69 回学術大会

標記学会が、9月3日から5日にかけて、東洋大学白山キャンパスを会場に開催され、本学から以下の発表があった。

岡田正彦 「啓蒙から修養へ—井上円了は仏教を哲学化したか—」

澤井義次 「R. オットーの宗教理解とヒンドゥー教」

島田勝巳 「クザーヌスにおける ordo の概念—『推測について』を中心に—」

幡鎌一弘 「開化政策と宗教変動—奈良の事例から—」

堀内みどり 「ラマクリシュナとインドの社会改革運動」

松田健三郎 「相関と回心—ティリッヒとアウグスティヌスの場合—」
(堀内記)

夏期特別講座「教学と現代VII」の報告

金子 昭

(天理総合人間学研究室)

最多の受講者が参加

8月28日、「信仰に基づく社会貢献活動とは—お道におけるNPO・NGOの可能性を考える—」というテーマで、夏期特別講座「教学と現代VII」(天理総合人間学研究室担当)が開催された。今回は、これまでの夏期特別講座で最も多い36名が受講。研究所員や取材・聴講者もあわせて約50名が参加し、会場も大学の第二会議室(中会議室)を取って行われた。

受講者の内訳もさまざま、テーマに関心のある教会長や布教所長、一般のようばく信者の他、天理大学教員や天理教国際たすけあいネット関係者の参加もあった。また、実際にNPO・NGOを立ち上げて活動をしていたり、あるいはそうした活動を計画中の教友もいて、会場は熱気に包まれた。

宗教の社会的貢献が叫ばれる昨今、天理教は、教団、教会、教区支部、個々の教友の単位で、それぞれどのような公益的責任や役割を果たすべきか。また、こうした公益活動は、本来の信仰活動や布教伝道と、どのように両立または連動するのか。多岐にわたる大きなテーマであるが、この特別講座では、さまざまな非営利組織(NPO)、非政府組織(NGO)の事例を踏まえ、本教の信仰に基づく社会貢献のあり方について議論を深めた。

午前の部はおやさと研究所の研究員4名が、午後の部では実際にNPO・NGO活動を行っている教会長2名がそれぞれ発題し、最後に受講者も交えて総合討論を行った。

午前の部—研究員による発表

第1講では、入門的講義として、私(金子昭)が「宗教の社会貢献とNPO・NGO活動—その入門的概説」と題して発題。NPO・NGOについての概念整理を行った。我が国では、NPOは主に国内での活動、NGOは主に海外での活動に用いられているが、実際には相互に内容が重なるものであると説明。そして、とくに法律による特定非営利活動法人(NPO法人)について、その設立のための諸要件や17項目の活動範囲について紹介した。その上で、本教がそうした活動を行う意義が社会的ひのきしん・たすけあい活動の新しい筋道を作ることであると述べた。

第2講は、堀内みどり研究員による「ネパールのNGO「Love Green Nepal」と本教の活動」の研究調査報告。Love Green Nepalは、「ネパールを緑にしよう」というモットーの下、持続可能な資源利用と森林の回復を、貧しい人々(とくに女性たち)と共に図っていこうとするネパールのNGOで、その創立者で現代表のアミラ・ダリ女史は天理大学にも留学したことがある天理教信者(ようばく)である。

堀内研究員はLove Green Nepalの活動の中に、ネパール社会で抑圧の状態にある女性のエンパワーメントの要素があることを強調し、それが地域活性化と生活向上に大きく貢献していると述べた。また、ネパールにおける天理教の社会貢献活動についても触れ、その中でLove Green Nepalと共同でヘルスキャ

ンプを行っていると紹介した。

第3講では、野口茂研究員が「宗教NGOによる国際協力活動の取り組み」と題して発題。我が国の国際協力NGOの3割は宗教と関わりを持ち、関西NGO協議会に加盟する団体のうち宗教関連団体は半数以上にも上るといふ。そうした国際協力活動において、多くの宗教NGOは、布教伝道や広報を目的とせず、信仰者自らの信仰実践として支援活動を位置づけている。野口研究員は、日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)、シャント国際ボランティア会(SVA)、そして立正佼成会の「一食を捧げる運動」のそれぞれの国際救援活動の理念や現状、また今後の課題について紹介した。

第4講は、佐藤孝則研究員が「環境市民ネットワーク天理—おぢばでの官民教学協働のNPO」について報告を行った。環境市民ネットワーク天理は、佐藤研究員が自ら代表をつとめるNPOで、1997年(平成9年)から天理市、天理教、天理大学、商業関係など各種事業体、そして一般市民が協働して天理市及び周辺地域の環境保全運動に取り組んできたが、今年8月24日、奈良県より特定非営利活動法人(NPO法人)として認証を受けた環境保護・エコロジー推進団体である。

このNPOは、天理教のお藤元「ぢば」において、教会本部関係者も巻き込んだ官民教学協働の活動を展開しているが、信仰者が関わる際にも直接、天理教の理念を前面に出さず、共に布留川清掃や街路樹の葉からの堆肥作りなどの活動を通じて自ずとお道の匂いが伝わるように心掛けていくという。ここで目指しているのは、天理市においてさまざまな立場の人々が協働して作り上げていく「新しい公共性」といふべき理念である。

午後の部—教会長による発表と討議

昼食をはさみ、第5講として、金子修・瑞友分教会長が「あらゆる難渋への対応を目指して—新たな教会活動を切り開くNPO・NGO活動」と題して発題。金子会長は国際協力のNGO活動としては、たすけあいインターナショナル(T.I.A.)を、また国内の地域支援NPO活動としてはNPO法人・印旛たすけあいネットを、それぞれ



組織し、その両方の代表を務めている。たすけあいインターナショナルでは、ケニアでの教育事業や教育里親募集、助産院建設などの母子の健康福祉の推進、自立支援のための自動車整備工場の建設や水利灌漑事業など、多岐にわたる活動のほか、タイの山岳民族支援のための奨学金プロジェクトも行っている。印旛たすけあいネットでは、あらゆる難渋への具体的な対応として、一人暮らしのお年寄りの生活支援、無担任教会の建物を活用した生き生きサロン(お年寄りの茶話会)、家庭内暴力や自殺願望者のための電話相談、山谷の日雇い労働者のための炊き出し活動、障害者の木工作业所での世話取りなど、各種の支

援活動を展開している。

金子会長がこうした活動を率先して行う背景には、地方における教会の活動低迷と教勢衰退の状況があるという。この厳しい現状認識の下で、今こそお道の者は時代の多様化・複雑化した難渋に対応し、人々の苦悩に正面から向き合って活動していかなければいけない。目標とすべきはどこまでも世界だすけであり、その結果として教会内容の充実もある。天理教がNPO・NGO活動に取り組む意義も、人々の難渋に対するたすけ一条の道を進めることに他ならないと、強く訴えられた。



第6講では、平野恭助・道竹分教会長により、「一布教師としての国際協力の歩み一岡山から世界の難儀へ」と題する発題が行われた。平野会長は天理教岡山国際救援委員会の代表を務めている。この委員会は、1992年（平成4年）に岡山教区青年会の活動として衣料救援

を行ったところに端を発し、現在までに、衣料を中心に配給食や、文具・玩具などの物資の支援、また井戸やチェックダムの建設などを、アフリカ、アジア、中南米諸国にて幅広く展開している。最近では、とくに同じく岡山に本部のある国際医療協力NGOのAMDAとも提携して、宗教者ならではの心魂の救済と医療の相互協力プログラムを実施している。

これらの活動をするにいたった経緯や現在の状況について、平野会長は自分の布教体験の中から紹介。アフリカでは救援に向かった先で難民に襲撃された体験や、貧しい物乞いの母子に出会った時の思い、また土地の文化や風習に合わせて黄色の教服で祭儀式を勤めた試みなど、さまざまなエピソードをユーモアある語り口で話された。

お二人の教会長の話は、教友がこうした活動に関わることで生き生きとなり、老いも若きも勇んで、教内の雰囲気も活性化する実例を示してくれるものだった。思うにそれは、NPO・NGOという形をとった活動が、社会のニーズにしっかりと噛み合った手ごたえのあるものだからであろう。その意味で、お二人に登壇していただいた意義は大きい。「教学と現代」では初めての試みだが、実践現場で得られた経験知の一端を、参加者がお互いに分かち合えたのは大きな収穫だった。

最後は、担当講師を交えての総合討論。ここでは、まず受講者の中から実際にNPO・NGO活動に関わっている教友4名から、各自の活動紹介をしていただいた。天理教国際たすけあいネットについて岡本孝雄氏が、京都で保津川の環境保全に取り組むNPOについて豊田知八氏が、大阪の旭都たすけあいネットについて橋本直之氏が、そしてタイでの教育支援事業について山本宏文氏が、それぞれの活動の内容を披露された。その後は自由な質疑応答を行い、議論の締めくくりとしては、天理大学社会福祉専攻の渡辺一城准教授に、専門の立場から総括コメントを述べていただいた。渡辺准教授は本教NPO・NGOの

課題として、その活動のすそ野の拡大、理念・哲学の確立、情報公開、教友が今以上に社会性を身に付けることの重要性を指摘された。

修了式では、深谷忠一所長より受講者代表に修了証書が手渡され、参加者全員の記念撮影を行った。その後、場所を研究所会議室に移して懇親会も開かれた。

おたすけの後方支援としての実践教学

教内では、すでに多くの教友がNPO・NGO活動を立ち上げ、社会福祉の各分野をはじめとして、地域おこしや環境保全、人権擁護、子どもの健全育成、また海外救援や国際協力など、それぞれの得意な分野において、信仰信念に基づく社会だすけを積極的に展開している。信仰に基づく社会貢献活動としてNPO・NGOについて考えるというテーマ設定の講座は、本教では、福祉課やひのきしんスクールでもまだ行われていない。しかし、このテーマを本教全体の課題として取り上げる機は、十分に熟してきたと言ってよい。それはおたすけの現場からのフィードバックでもあり、これにより実践教学も鍛えられているのである。

今回、大教会長自身のお声がかかりで、この講座を受講するようにと促され、大教会単位で4名が参加したところもあった。総合討論においても、NPO活動ばかりすると教会に来なくなるという異論に対して、むしろ対社会的活動に熱心な者ほど教会活動にも熱心であるという意見も提出された。また、本教組織のあり方として、教会系統や教区支部だけに止まらず、今やたすけの主体として相互に結びついた組織こそ求められるべきではないかと、さらに進んだ問題提起もなされた。実際のところ、NPO・NGOはそうしたあり方の組織でもあり、それほどまでにNPO・NGOはそれに関わる教友を勇ませ、結果として教勢活性化につながる有効な対社会的活動なのである。

この講座で提起され討議された諸問題は、いわば実践知の生のデータである。これをもとにして、今後は、現場でのおたすけ活動を積極的に後押しし、より充実したものになるような後方支援的な貢献が行えるよう、実践教学研究を一層進展させていきたいと思う。



コンゴ出張報告

森 洋明

コンゴ共和国が1961年8月15日に独立して今年で50年目を迎えた。街中の至るところで、50周年を祝う看板や飾りが目についた。歴代の大統領の写真、独立記念日に公式に招待されている国々の旗、国威発揚のスローガン。テレビやラジオ、新聞では独立を祝う特別番組が生まれ、50年の国の歩みをまとめたドキュメンタリー映像が、何度も放映されていた。

街中の大きなロータリーでは、これまで見たことのない大きな噴水が水しぶきをあげていた。大統領官邸近くでは建物はきれいに塗り直され、官邸の庭にはレセプション用の大きなテントが張られ、50周年を祝う横断幕が風になびいていた。コンゴ河岸には大きな船が停泊し、夜のコンサートの舞台となった。

その一方で、独立から半世紀を迎える国民はどちらかと言えば冷ややかだった。国民の生活はなかなか向上せず、その半数



街の飾り付けの様子

以上が貧困層と言われていた。遅々として進まないインフラの状況は、首都であっても何の予告もなしに断水や停電が繰り返されている。地区によれば3カ月も停電状態というところもあるようだ。その中で、電球で照

らし出される飾り付けや途絶えることなくあふれる噴水は、庶民の感情とかけ離れているように見える。

そんなコンゴに天理教海外部からの依頼を受け8月2日から9月3日



修了書を手にして

まで滞在し、教会や布教所で教義セミナーを行った。合計42名が、1週間のプログラムに臨んだ。毎年行われており、これまでの受講生は合計200名近くになる。内容は基本的教理、教祖伝、おてふりなどを学ぶものであるが、彼らの厳しい現実の生活の中で、いかに日々生かされていることの喜びを実感し、ご守護に感謝するようになるのかが大きな課題でもある。日本とは気候や風土、社会のあり方が全く異なる地で、彼らの生活に合った説き方が問われていることを改めて感じる滞在であった。

コンゴ伝道も、二代真柱のコンゴ初訪問から今年で50年目を迎える。コンゴ人信者が人類普遍の教えを学びつつ、それが彼らの生活とかけ離れたものとして映ってしまうなら、一般庶民が水汲みのバケツを片手に噴水を眺め、停電の中で大通りの輝く電球の飾り付けを見つめるコンゴの現状と何ら変わりはない。

新刊案内



早田一郎著『天理教文献余話』(グローバル新書11)を出版しました。

本書には、2007年1月から2009年12月まで、36回にわたって『グローバル天理』に連載された論考がまとめられています。

おやさと研究所事務室、天理大学売店(テンフィフティ)、道友社各販売所でお求めいただけます。

(頒価800円+税)

(4頁からの続き)

場)、永野藤雄氏を会長として華中永祥教会(肥長)がそれぞれ設立される。

本資料の昭和17、18年の記録では、後に天理教が華中奥地に設立する「大和医院」に関わる記述が目立つ。当時、天理教の医療救済事業の実現には、大東亜省、軍、領事館、そして医療組織である同仁会に関わり、宇野庁長らがそれらとの対応に苦勞したことが窺われる。また、理事としての宗聯における活動、天理教と回教との交流、伝道庁の新市街地における農場経営計画などの一端を知ることができる。

[註]

- (1)『広辞苑』(第五版)によると、法幣は①「法律上その運用が強制されている貨幣」、②「1935年、銀貨を禁止し、代りに通貨とした中国国民政府(蔣政権)の法定紙幣」とあるが、ここでは後者を指しているのであろう。
- (2)後の大和医院懷遠本院、同蚌埠分院のこと。

グローバル天理

第11巻 第10号 (通巻130号)

2010(平成22)年10月1日発行

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan